

【助成事業の名称:土蔵コミュニティカフェを活用した交流型町歩きイベント～歩み+茶屋】

ポイント

着物姿での街歩きが似合う江差追分の街

かつては北前船とニシン漁で栄えた江差の町で、往時を忍ばせる歴史的建造物と文化を基調に「いにしえ街道」を整備し、“江差の五月は江戸にもない賑わい”というストーリーで日本遺産の認定を受けた。商店街ではひな祭りや朝市、着物姿での歴まち散策など趣向を凝らしたイベントを積極的に企画して街への集客促進と地域の活性化に取り組んでいる。

商店街情報

所在地:北海道檜山郡江差町字中歌町193-1
 商店街の類型:地域型商店街
 地域の人口:7,956人 4,322世帯
 (江差町 平成29年3月31日現在)
 組合員数:22名(2019年10月)
 (主な業種構成:飲食店、食料品販売、燃料販売、薬局、美容院、ホテル、金融機関)
 電話:0139-52-0531 Fax:0139-52-4704
 URL:<http://esashi.sakura.ne.jp/rekimachiHP/info/>



商店街の風景

商店街の概要と近年の環境変化

函館から車で約1時間40分、日本海に面する江差町。江戸時代から明治の初めにかけては北前船の最北の寄港地として、また盛んなニシン漁により「江差の五月は江戸にもない」とうたわれたほどの繁栄を誇った。当地発祥の民謡「江差追分」は、毎年9月に全国大会が開催され、その伝統を今に伝えている。

江差歴まち商店街は、「江差いにしえ街道」の愛称を持ち、港や役場に程近い約1.1kmの街区を有する“観光交流型商店街”で、隆盛を極めた頃の間屋蔵、商家、町屋、寺社等の歴史的・文化的な建造物がそのまま残り、情緒溢れる街並みを形成している。組合員は現在22名、飲食店、食料品販売、燃料販売、薬局、美容院、ホテル、金融機関等により構成されているが、生鮮三品がないことが悩みの種でもある。

当商店街では、こうした歴史・文化を活用した街づくりを進めるため、平成元年より北海道によるプロジェクト「歴史を生かすまちづくり事業」により景観に配慮した街区の整備をスタートした。運営組織の面では、平成4年に「歴まち商店街組合」を設立、平成8年に協同組合として法人化し本格的に近代化事業に取り組んだ。本事業では、セットバックによる道路の拡幅と舗道の整備、電線地中化、建物の修景、下水道・公園の整備等で、16年11月に完成し、17年に「いにしえ街道」のオープンフェアを開催。江差追分などの披露や郷土料理の屋台や朝市、住民参加型のイベント等で盛り上がり、その後のソフト面の活動の基盤となった。

一方、江差町の主要な産業は農業・林業・漁業が中心で就業可能な産業が少ないため、外に出る若者が多いことと住民の高齢化が進んでおり、その昔は3万人を数えたといわれる人口も現在は8千人ほどに減少し、地域の商業基盤は脆弱なものとなっている。また、観光



江差追分大会の様子



旧中村家(国の重要文化財)



景勝地で有名なかもめ島と北前船「海洋丸」

交流型の商店街を目指しているものの、木古内と江差を結ぶJR江差線が平成26年に廃線となり、バス便の運行となったため観光客を中心に足の便が悪化した。さらに、江差町内には大勢の観光客に対応できる宿泊施設や飲食サービスがないため、「追分会館」を訪れる多くの観光客は日帰りで函館に戻るパターンが多く、地域活性化への貢献は必ずしも十分とは言い難い状況にある。

助成事業の概要とその成果

当商店街では、江差町商業近代化推進事業によるハード面の整備とともに、交流おもてなし事業として「百人の語り部」、「店主似顔絵キャラクターの作成」、「いにしえ夢開道」等のソフト面の事業を実施しており、さらに平成23年からは「北前ひな語り～歴まちのおひなさん～」や「花嫁行列」等の新規事業を企画してきた。

こうした中で、平成26年5月のJR江差線の廃止に伴い、これを惜しんで乗車する鉄道ファンや観光客が増加。これらの客を商店街にも呼び込もうと25年度の助成事業では観光交流型の街歩き事業を中心に事業を実施。さらに、26年度には商店街にある歴史的な蔵を巡りながら、職人によるこだわりの逸品を探す蔵探訪イベントを中心に事業を実施した。

【平成25年度事業：土蔵コミュニティカフェを活用した交流型街歩きイベント～歩み+茶屋】

<歩み+茶屋～テーマ散策と土蔵カフェのコラボ～>

主に町民を対象に女性組合員が中心となって、江差駅から歴まちへのウォーキング、健康増進のナイトウォーキング、「壺番蔵」などの歴史的建造物の見学等を10月から12月の間に3回実施。ナイトウォーキングでは100個の行灯で通りを照らしたほか、街歩きの途中でコミュニティカフェを利用し、人々の交流と江差の歴史・文化について学べるイベントとした。

<コミュニティカフェと商店街の連携研修事業>

若手や女性の組合員を対象に、歴史的資源とコミュニティカフェを活用した商店街の活性化策について、先進地の視察を含めて2回の研修を実施。視察では青森県五所川原市の歴史的建造物を活かした街づくりを学んだ。

【平成26年度事業：いにしえ蔵語り～北前の歴史と職人技が生きる蔵探訪イベント事業～】

「北前船の歴史と職人技が生きる商店街」をコンセプトに、街のシンボルである土蔵店舗に焦点を当てて“土蔵蔵と職人の逸品”をPRするイベントと、街歩きのガイド育成のための諸事業を実施した。

<蔵語りイベント>

「商店街と職人と料理人が造る“蔵のしつらえ展”」と題し、カフェ・職人・商店街が一体となって土蔵の歴史・文化性を外部にPRするためのイベントを開催。モノづくり系大学とも連携して古い町並みの写真やねぶた行灯等の展示のほか、交流カフェランチを開催した。

また、季節感ある街歩きとしてガイドとともに歴史的建造物や土蔵店舗を回るウォーキングイベントを4回開催。職人の逸品を紹介してリピーターの確保を狙った。

<蔵ガイド魅力向上事業>

ウォーキングイベントと並行して、蔵などの歴史的資源と商店街を紹介する「蔵語りガイド」育成のための勉強会や研修会を開催。併せて、土蔵等の調査と「蔵語りガイド閲覧冊子」を作成するなどいにしえ街道PRの基盤づくりを行った。

<事業の成果等>

助成事業で実施した街歩きのパターンは江差の観光ルートとして定着しており、観光客等の回遊性の向上と滞在時間が増え、新たな消費と賑わいが生まれている。また、事業に取り組むために観光PR用の材料を発掘したことにより、歴町周辺の文化遺産や歴史を組合員が再認識し、その後の事業企画に役立った。さらに、女性組合員が積極的に取り組んでくれて、ウォーキングやコミュニティカフェの充実につながり、イベント事業の基盤が強化された。特に、今回の取組みにより、普段はあまり商店街を利用しない住民等からも好評を得た。



商店街活動の拠点に蔵を活用



助成事業以降の商店街活動

当商店街では、助成事業実施後も北前船やニシン漁等の歴史と文化を基盤とした集客イベントを継続して実施しており、毎月2～3回のイベント事業を展開するなど、積極的な取り組みを行っている。その主なものは以下のとおり。

【春の江差いにしえ夢開道事業】

“江差の五月は江戸にもないほどの賑わい”と言われた往年を偲び、毎年5月に開催している「春の江差いにしえ夢開道事業」は平成4年に始まり今年で27回目を迎える。催しの目玉として、花嫁行列を開催。1・2組のカップルが、いにしえ街道を長持唄にのせて姥神大神宮まで艶やかに練り歩くもの。これに加えて地元中高校生の演奏やダンス、江差追分の歴代優勝者による実演、お茶席、地元産品等の屋台、手工芸の販売等で賑わいを創出している。

【夕焼けコンサート&ビアガーデン】

毎年7月に、道文化財の「姥神大神宮前広場」の前などで夕日をバックにコンサートとビールを楽しむイベント。子供たちによる吹奏楽の演奏やジャズライブも行って地域の人々に楽しんでもらっている。

【姥神大神宮渡御祭】

毎年8月に、商店街のほぼ中心に位置し、ニシン漁の始祖として漁業家の信仰をあつめる北海道で最古の神社「姥神大神宮」の大祭が開催され、商店街を13台の山車が練り歩く。江差出身者はこれに合わせて帰省する人が多く、観光客も含めて2万人の人出で賑わう。

【年末年始「夢」サービス】

姥神大神宮の初詣客へのおもてなしなど地域の年越しイベントとして、歴まち活動拠点の壺番蔵を休憩場所として提供し、餅つきや餅撒き、お祝いの切り声、干支のマスコットなどの物販を実施。いにしえ資源研究会の協力を得て、竹籠で制作した行灯「炭(たん)ころりん」を140世帯に配布して、冬の北海道の町並みに温かさを添えている。また、江差と親交の深い青森県五所川原市のねぶた師を招いて作成した「ねぶた行灯」もイベント時に飾られる。

【江差・北前のひな語り～歴まちのおひなさん】

全国から不要になった約180組のお雛様を引き取り、北海道観光の閑散期となる2月から3月の約一ヶ月間、会員の店舗や江差町内の施設50箇所に飾って来街者の目を楽しませるひな祭り事業で平成23年より継続して実施している。期間中は、お茶会、お琴の演奏、御神楽披露、メイクアップ教室、クラフト体験等10以上のイベントやガイドツアー、子供向けスタンプラリー、フォトコンテストを併せて開催し集客に努めている。

【着物で歴まち散策】

助成事業を実施した後、函館で観光客が洋装をレンタルしてレトロな街並みを歩く観光プランがあることを知り、和装に着替えた観光客が江差の町を散策し、希望者はお守り作りや抹茶を点てるなどのワークショップに参加する新事業を企画した。着物や小物は町の人々からの寄付により集め、美容師の会員が着付けやヘアセットを担当、着替え等の準備は空き店舗を利用した。この企画は4月末から10月末の期間中、予約をすれば1人2,000円で誰でも参加でき、江戸から明治期の歴史が香る美しい街並みを目当てに東南アジアの観光客を含め年間80名ほどが参加している。



上 いにしえ夢開道 下 夕焼けコンサート



上 北前のひな語り 下 着物で歴まち散策



自治体による活性化支援等

江差町

江差町は江戸から明治の初めには北前船とニシン漁で栄え、地域の産業・経済の中心的役割を担い、江差追分に代表される伝統文化を今に伝えている。現在の町の人口は8千人弱で、町内に大きな産業がないため高卒以降は外に出る人が多く、依然として減少傾向が続いている。さらに、平成26年に江差と木古内を結ぶ江差線が廃線となるなど、交通の便も厳しいものとなっている。

江差町では、平成元年から「歴史を活かすまちづくり事業」に取り組み、街路の拡幅と歩道の整備、店舗等の整備を中心とする商店街近代化事業を行い、平成12年からは中心市街地活性化計画に取り組んできた。商店街の近代化事業は平成17年に完成し、平成29年4月には歴まちの地域と江差追分などが日本遺産に登録された。毎年9月には江差追分の全国大会が開催されて「追分会館」を訪れる観光客も多い。さらに、7月には「江差かもめ島祭り」、8月には北海道で最も古いといわれる「姥神大神宮渡御祭」が行われ、大勢の町出身者が帰省して大変な賑わいとなる。しかし、江差町には十分な宿泊施設がなく、観光客の多くは函館に宿泊する日帰り観光となっていることが課題である。

現在、江差町には五つの商店街があるが、町民の多くは近隣の大型店やロードサイド店を利用しており、商店街での買い物は少なく、小売店の活性化が喫緊の課題となっている。このため江差町では、「頑張る商店街応援補助事業」を150万円の予算で実施しており、歴町商店街もこの事業を活用している。

町の人口減少が続く厳しい環境にあるが、今後は、商店街が地域観光の核となって地域の振興に大きな役割を果たしてくれるよう、開業の支援や不足業種を埋めるための支援等を進めていく予定である。



商店街の今後の戦略

商店街が中心となって地域活性を目指す

江差町の人口の減少と高齢化の問題は商店街の活動にも大きな影響を及ぼしている。消費が減少し新規参入が一段と難しくなっている中で、店主の高齢化による廃業の増加が懸念されており、今後の活性化策が大きな課題となっている。

現在、商店街の組合員数は22名と少ない中で、着物で歴まち散策、北前のひな語り、いにしえ夢開道など毎月のように事業を実施して賑わいづくりに取り組んでいるが、人員不足や会員の高齢化等で事業活動も厳しい状況となっている。このため、これからは他団体とも連携して商店街活動に参加してもらう等の体制づくりが必要と考えている。また、イベントで集客力が増えても組合員店舗の売り上げに結びついていない点も課題である。特に、大型バスで訪れる観光客に対応できる宿泊施設や飲食店等が不足していることも大きな原因の一つである。

今後は、ひな祭りや夢開道等の事業を実施しながら、新たな出店者を迎えるなど空き店舗や空いている土地の活用を検討し、活性化と購買に繋げるための工夫をしていきたい。



～ 仕掛け人 ～

江差町歴まち商店街協同組合

右 理事長 萩原 徹

左 江差商工会経営指導員 竹田 直人

取材を通じて明らかになったこと

地域の歴史・文化を活用した活性化への取り組みが各地で行われているが、賑わいを継続し、消費の増大に結び付けていくには多くのハードルがある。当商店街では、北前船とニシン漁の歴史を背景に街区と景観の整備を進めつつ、一方では街歩きや朝市などのソフト面の事業を充実させてきた。特に、女性組合員による発想ときめ細やかな対応が「着物姿での街歩き」などの事業につながっている。景観だけではリピーターを生むことは難しく、人を引き付けるその地域の人々の魅力と物語が不可欠である。若手役員と事務局が一体となって新たな賑わいづくりに取り組む姿勢と努力には学ぶべきものが多い。